〈翻　訳〉

# フランスの革命運動　一八一五―七一（1）

ジョン・プラムナッツ
高村忠成（訳）

## 序論

### (1)　本書の性格

本書は歴史についての評論ではない。というのは、事件に関する論評よりも、むしろ事件についての記述の方がはるかに多いからである。だからといって本書は、綿密な研究成果でもない。すなわち、本書は新たな事実に光をあてているのではなく、先人の業績を土台にしたものであり、フランスの歴史家が書いたそれぞれのテーマについてのたくさんの書物の恩恵に浴したものである。

しかし、歴史を自分の楽しみのために読むイギリス人にとっては、今日、大革命時のフランスの出来事や、また、テルミドール反動からナポレオンの第二次没落までの諸事件については、案外簡単に事実経過を把握することができる。たとえイギリス人だけにそのための時間や思索をする余裕が与えられているとしてもその事は事実である。だが、そのイギリス人にとっても、一九世紀の急進的、革命的運動については、歴史家が収集した事実や打ちたてた理論は、

何百という書物に散乱しており把握することが極めて難しい。それらの書物のいくつかは優れており、それらの多くは読むのにそんなに骨はおれない。しかし、そうした書物は、私が興味をもっているテーマについては、他のテーマについても同様だが、わずかしかふれていないか、または、そのテーマについて他の記述を読んでいない人を誤らせてしまうほど非常に偏見にみちている。

もちろん私は偏見を非難するつもりはない。偏見は、人がある方向を注視しようとすると真実をおおい隠してしまうという面があるが、他の方向をみる場合には、その視力をとぎすます働きをするものである。さらにいうならば、偏見が最も強いのは現地の人であるが、しかし、自分たちの国のことを最もよく知っているのも現地の人たちなのである。偏見に満ちた、知的なフランス人が母国について記した見解は、ある外国人が、いくら学識豊かで勤勉で、しかも好意的であるとしても、その外国人の見解よりは価値があるものである。公平であるということと、理解しているということとは別問題である。ゆえに、我々は、他国の歴史を娯楽のためとはいえ学ぼうとする時には、この点をつねに心がけておく必要がある。もちろん、公平ということは、外国人にとっては身につけるべき最善の美徳であり、それはそれ自体貴重な効果をもっている。

私は、本書では、明快、正確かつ幅広く論じることを心掛けた。限られた紙数をはみ出さないように注意しながら、それでもできるだけ多くのことを盛り込もうと努力した。私はこみいった議論も紹介しようかと思ったが、本書にとって重要でない場合は、そうした議論は省略することにした。しかも、文体についても飾り気のないすっきりしたものにした。というのも、こうした方が、読者は、歴史家から大きな犠牲を与えられることなく、どんどん読み進めることができるであろうと思うからである。もちろん、それにともなう犠牲は、歴史家が全面的に負わなければならない。なぜならば歴史家は、たとえ知恵によるのではなく、少なくとも思慮分別によって要求される条件を無視しても、自分の言いたいことを言わなければならないからである。歴史家は、しばしば小説家のもつ自信、すなわち、世界は自

分がそれを認識するがゆえに存在するのであるという自信をもって、話さなければならない場合があるのである。

### (2)　マルクス主義史観の誤謬

私は本書では、何人かの歴史家たちがいう革命の「下部要因」という問題については論じなかった。むしろ私は、マルクス主義者たちが陥りやすい大きな誤謬を回避することにつとめた。その誤謬というのは、彼らが事象そのものをありのままに観察するというのではなく、むしろ事前にその事象の原因を決めつけてしまおうとするところにある。彼らは、自分たちは革命とは何かということを知っており、また、どんな出来事が革命の原因でなければならないかということもわかっていると信じている。

彼らはこの知識を、歴史からではなく哲学から得ている。ということは、歴史家としての彼らの仕事は、起こった事象を発見するのではなく、起こらねばならなかったことを発見することなのである。彼らの歴史についての考え方は、完全に誤っている。すなわち、その考え方は、歴史家によって記録される諸活動は、非常に多くの分野にまたがるが、そのなかでもあるひとつの活動が、他の活動にくらべて「根本的」なものになると仮定している。これは根拠のない仮定である。なぜならば、この考え方が真理であるという証拠はないからである。いなそれはまた、危険な仮説でもある。というのは、その仮説をたてる人は、自分たちが発見したい証拠だけを探そうとするからである。

マルクスと同時代の人々で、本書が記述している出来事を、マルクス以上にじっくりと観察した人はあまりいなかった。いやしくもマルクスこそ鋭敏な観察者であった。しかし、不幸にも彼は、青年期に自分をひとつの哲学でもってしばってしまった。その哲学のために、彼は自ら「優れて」革命的とよんだ国、すなわち、フランスの出来事のなりゆきを理解することを永久に不可能にしてしまった。しかしそれでも、マルクスはフランスでの出来事に一つ一つ反応し、のちに、『共産党宣言』、『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』、『フランスの内乱』というパンフレット

のなかで詳述されている共産主義の政治理論の多くを打ちたて、共産主義者に提供したのである。

じつにマルクスは（ある人の哲学が彼の知性をたんに邪魔するだけで破壊しないがゆえに）、彼の理論と矛盾する多くの事実を発見し、それを記録した。しかし、彼は、より一般的な結論を引き出した時、彼はそれらの事実を忘れてしまったか、または、それらの意味に目を背けてしまったのである。彼は、フランスは時がたつにつれてますます革命的になっていくであろうと考えた。そのため、彼は、パリ・コミューンを、プロレタリアートとブルジョアジーとの間の新しい戦争の緒戦であると見誤ってしまった。彼は、ルイ・ブランやプルードンのことを軽蔑したが、しかし、なぜフランスの労働者たちが彼らの理論に傾注するかについては決して理解しようとしなかった。私の時代が終る後に、フランスの社会主義運動がマルクス主義的になる時がついにきた。しかし、そうなる時までには、フランスの社会主義運動は革命的であることを止めてしまっていたのである。

### (3) フランスの一連の革命について

一七八九年から一八七一年までのフランスの一連の革命運動と比較できるものは、世界のどこにもなかった。その一連の革命のなかで、一番最初でまた最大の革命は、おそらく最も期待されておらず、最も統制がとれず、また理論に立脚したものではなかったであろう。すなわち、人々は革命を積極的に準備する心構えを全くしていなかったのである。哲学は、旧秩序がよりどころとしていた信条や忠誠の多くを破壊したが、しかし、一七八九年の革命家たちが、一七九四年に行きついた時、そこには、政府や社会についての理論は何もなかった。ただあったのは、人間の諸権利に関する抽象的な原理だけであった。革命の重要な根拠になったのは、ヴォルテール、百科全書派、そしてルソーらの書物であった。だが、その書物は、どれひとつとして、例えば『社会契約論』でさえも、旧フランスを解体することによって生じる諸問題を解決するのに、適用できる理論を革命家たちに提供していたわけではなかった。

もしルソーが描いた理想的な状態のコピー（たとえ不完全なものであるにせよ）に似た政治社会がかって存在したとするならば、それは、ジャコバン派による革命的なフランスではなく、一八七一年のパリ・コミューンであった。コミューンは、小規模な政治社会であり、質素で、平等で、民主的であった。それは所有権を尊重し、貧しい人々を救済し、富者を嫌悪し、人民から直接信任されない権威を否定した。しかもそれは、組織的な政党とか、またはひとつの党派とかには決して支配されなかった。しかし、コミューンの兵士たちは、ルソーの弟子ではなかった。もし彼らの理論がだれかから借りた物であるとするならば、それはプルードンの理論であった。

一八三〇年の革命は、大革命と同様に、理論にもとづいてなされたものではなかった。だがそれは、大革命よりは統制がとれていた。自由派は、その革命を自分たちの都合のよい地点で停止させることができた。だが共和派は、その革命から期待したものをまったくえられなかったというわけではなかったが、それでもえられたものはわずかでしかなかった。

一八四八年の革命は、三〇年の革命より規模が大きく、また、複雑であった。すなわち、その革命には、すでに広い目でみていくつかの理論があったし、ぜひそれを実現したいと望む熱心な人々もいたのである。しかし、ただ権力を欲したルイ・ナポレオン以外に、自分の望みをかなえた人はだれもいなかった。フランスの一連の革命の中で、最も悲劇的で悲惨だったのは最後の革命であった。というのは、もしそこに十分な善意と良識が働いていれば、それほどの悲劇にはならないですんだであろうからである。一八七一年にパリで二万人ものフランス人が死ぬ必要はなかったのである。

### (4)　革命の評価と性格

歴史家たちは、しばしばあの革命は失敗でこの革命は成功だったと評価する。彼らは、最初のフランス革命は成功

であった。二番目のも成功した。だが三番目の革命は失敗であり、パリ・コミューンも成功したとはいえないという。

じつは、このような決めつけ方をするのは誤りである。というのは、革命はたんに発生するだけであり、それには失敗もなければ成功もない。革命は人間ではないし、それには目的はない。革命は、人間または人間の諸集団によってなされ、人間や集団の目的というものは異っているだけではなく、いつも変化しているものである。革命には原因と結果がある。それは、自らの発生基盤である社会を、しばしば大きく変化させてしまう。

革命の失敗ないし成功について論じることは、二つの仮説のうちどれかひとつを想定することであり、じつはそれは両方とも誤りなのである。すなわち、ひとつは、革命というのは、革命が求めるものを知っていて、それゆえに、それを達成しようと行動する人々の集団、または、階級によってなされるという仮説であり、もうひとつは、革命は、本来、予定のコースを規則通り進んでいる社会を、突然急に前へ押し出すという歴史的な機能をもっているという仮説である。こうした仮説は、それ自体、一連の長いフランスの諸革命から作りだされた伝説である。しかも、他の伝説と同じようにこの伝説もまた、歴史のコースに影響を与えたのである。

## (5) 革命を理解するために

もし私たちが革命を理解したいと思うならば、出来事を正確に順序だてて把握することを忘れてはならないと思う。社会歴史家や思想史家たちは、変化、改革、発明、そして、（評価が困難でしかも何千年にもおよんでいくような影響力をもつ）理論を記述する。一、二年以内ならば、変化や改革がいつ起ったのかわれわれは覚えているし、そうした出来事の意味や、出来事が起こった社会に、それらがそれぞれどのような影響を及ぼしたのかを理解することができる。歴史家は、出来事を個別に記述していくが、その際彼は、読者に、それらの出来事は部分であり、部分が構成する全体を見失なわないようにと期待する。しかし、革命という問題が記述される時、読者にとって一番重要なこと

は、なにが、どこで、どのようにして、いつ起こったか、ということを正確に知ることである。もし読者が、ある出来事が他の出来事よりも前に起ったということを知らなければ、彼は両方の出来事の意味を見失ってしまうであろう。

革命の時代には、人々は突然の恐怖とか希望に一喜一憂する。ある計画が作られたかと思うとすぐに変更されたり、時には放棄されたりする。また、対立している集団の力も絶対に変わらないというのではなく、常に変化している。様々な機会が、しばしば気づかれないうちに去来する。指導者たちは、すばやく行動にでる場合もあれば、遅れることもある。タイミングのよい行動というのはめったにない。彼らは計算をする。だがその多くは誤算となる。しかし、だからといって計算が必要ではないということではない。というのは、彼らはまた、歴史の流れを変える行動にと行きつくからである。

革命は、まさに劇的と呼ぶにふさわしい。というのは、なにもそれが暴力に彩られているからというのではない。革命は、場面から場面へ、最初から最後まで、瞬間瞬間変化しながらも、そこにある一定の統一性を現出しているからである。革命期には、人々は興奮し、互いに攻撃しあう。そうしながら一つ一つの事件を次々と生みだしていく。そして、自分でもよくわからないうちにそれらの事件によって押し流されていく。すなわち、人々は自分自身の感情と計画の犠牲になるのである。革命というものは、解釈されるものではなく、語られるべきものなのである。しかもそれが明解であるためには、厳密で順序だてられていなくてはならない。

## (6)　フランスの革命運動の特色

しかし、革命運動というものは革命ではない。すなわち、革命の期間は、短くても実際よりは長く感じられるものであるが、その革命期と革命期の間には、平和な年や、不安定もしくは無関心の年や、あからさまの抵抗またはひそかな反抗の年、などがあった。革命運動とはなんであったのか、また、それはどのようにして一九世紀のフランスの

諸革命に影響を与えたのであろうか。

私がここでいう革命運動とは、ブルボン家であろうとボナパルト家であろうと、フランスにおける王制を打倒したいと願ったあらゆる種類の集団の行動のことである。これらの集団が、すべて革命的であったというわけではない。実際、革命的だったのはわずかでしかない。しかも、革命的なものは、一番人気がなかった。それでもなお、それらの集団は体制と全面的に対決し、あるものは、体制を倒した。それらの集団も、革命を受け入れたのは彼らが革命を行ってからであった（ただパリ・コミューンは唯一の例外である）。彼らは、革命のコースをはっきり定めようと努力した。そして、それらの集団はすべて、そのコースを確定するのに貢献したのである。

これら諸集団は、精神的には大革命の考え方を受けついでいた。大革命こそ、その出来事のそれぞれの場面、局面において、それらすべての集団の手本であり、感化の源泉であった。たとえ諸集団が（頻繁に行使した）暴力を控えたとしても、たとえ諸集団がしばしば暴力を現在いな将来においても非難しても、それらの集団は、つねに大革命を賞賛し、弁護した。そして革命中に宣言された原理のいくつかを固く守った。彼らのフランスとは、大革命によって生み出されたフランスであった。だからかれらの仕事は、大革命が手がけたことを、自分たちが見た限りにおいて、完成させることであった。

諸集団は互に仲がよかったわけではない。それらの喧嘩は、しばしば内乱になることもあった。しかし、われわれの時代には、その長きにわたって、それら諸集団は、おたがいに好むと好まざるとにせよ、同盟関係にあった。共和国が最終的に樹立される以前の五〇年間、さまざまな状況から、彼らは何度となく和解したことがあった。こう考えると、この共和国は、彼らの努力、抵抗、革命の賜物であり、喧嘩の産物であった。かれらは大革命がなしえなかったことを成就した。かれらはフランスを共和的に、また、民主的にした。もし諸集団が、結果的にこれまでとってきたような行動を起こしてこなかったならば、諸革命（彼らがそれを意図しようとしなかろうと）は、決して勃発しな

かったであろう。また、もし諸革命が勃発しなかったならば、諸集団は、フランスを、名目だけではなく実質的にも、一八七〇年以降のような状態、すなわち民主的な共和国にする契機をもつことはできなかったであろう。これこそが、たとえそれら諸集団の間に反目があろうとも、また、彼らの中の穏健派（いつの時代でも多数派であった）が恐れ、慎重になり、悔もうとも、彼らの行動のすべてを革命運動の中に含めざるをえない理由である。諸集団の間の反目が、彼らの共通の敵である特権階級や権威的政府、そして、教会に対する戦い以上に、大きな問題となってくるのは、じつに一八七〇年以降になってからである。

# 第一章　大革命

## 第一節　フランスの共和主義

### (1)　共和主義運動

ここでいう革命運動とは、共和主義の運動ともいえる。実際、多くのフランス人もそのようにうけとめてきた。しかし、本書はイギリス人のために書かれたものであり、イギリス人は、共和主義とはたんに反王制ととらえている。ところが、一九世紀フランスの共和主義運動は、たんなる反王制運動ではなかった。それはじつに過激であり、またある面では社会主義的な性格も帯びていた。結局それは、二重の意味で革命的であったのである。また、共和主義運動は、大革命によって勢いをつけ、大革命ほど大きくはなかったが、三つの革命を引き起こした。フランスの共和主義運動こそ、フランスの政治を、今日のような姿に、すなわち、フランスをそれ以前の状態よりももっとイギリスに近い形に、自由主義的な、社会主義的民主主義社会にしたのである。

フランスにおいて共和的であるということは、一七八九年から一七九四年にかけての最初の偉大な革命、すなわちフランス大革命の原理をうけ入れるということである、といわれてきた。しかし、大革命には多くの段階があり、一七九四年の最後の段階になった時には、一七八九年当時、自ら進んで自分たちは革命家であると名乗っていた多くの人々が、彼らがかって国王を嫌悪し恐れた以上に、フランスの新しい支配者たちを嫌悪し恐れるようになったのである。

近代フランスは、人民を広く二つの階級、すなわち、大革命を容認する人々と、それを否定する人々とに分けることはしなかった。もちろん、「一七八九年にフランスは、退廃と無政府への長い道のりの第一歩を印してしまった」

といって、その革命を非難した人々はいた。シャルル一〇世の統治時代の数年間は、それら革命を非難した人々がフランスの唯一の支配者になるのではないかと思えた。しかし、それらの人々は、フランスの諸革命のなかで最も穏健な革命でもって、フランスから追放されてしまった。フランスの共和派にとって、真に恐るべき敵は、正統王党派ではなく、オルレアン派であり、ボナパルト派であった。その両派もまた、違った意味ではあるが大革命の落し子であった。一八一四年から一八一五年にかけての復古王政が再度もたらしたものは、ただの王政であった。しかも、復古王政は、総裁政府やボナパルトによって、いまだに破壊されていなかった革命の遺産を、何も壊すことはしなかったのである。

### (2) 教　会

だが、共和派にとって、オルレアン派やボナパルト派よりももっと手ごわいものは教会であった。それは共和派にとって最大の敵であった。教会は旧制度の遺物ともいえよう。ただ教会の多くは、旧制度以来のものとはいえ、なかにはブルボン王朝初代の王・アンリ四世（一五五三—一六一〇）の後継者のもとで発展してきたような古い王政以前からのものもあった。すなわち教会は、ブルボン王朝の絶対政府よりもはるかに古い時代からはぐくまれてきたのである。教会は、時には王統王党派と親密になることもあったが、だからといって彼らに強い好意を寄せていたわけではなかった。教会は恐らく、恐怖政治の時に弾圧された人々に対して寄せた同情と同じような感情を、王党派に対して懐いていたのであろう。教会は強靱であった。とはいえ、強力な味方なしになんでもなしとげてしまうほどには強くはなかった。正統王党派はみかけほど強力ではなかった。ただ、しばしばいかにも強そうにみえただけである。

なお、共和派の最大の敵である教会は、正確には大革命の継承者ではなかったが、ある意味では、大革命によって創られたものとなった。教会はもちろんいつも変わらない存在であった。同じ教義を説き、つねに地上での伝導を行っ

ていた。しかし、教会は、革命によって浄化され、規律が整えられ、中央集権化されたのである。下位の僧に対する司教の権威、司教に対する法王の権威は、一七八九年以前よりもはるかに強化された。フランス・カトリック教会のローマ教皇の絶対権に対する独立自治権要求の主張であるガリア主義は、死んではいなかったが、ゆっくりと死滅に向かいつつあった。一九世紀のフランスのカトリック教会の状態は、道徳的にも政治的にも、一八世紀よりもはるかに強力になっていった。すなわち、教会はまた、たとえローマからではないにせよ、当時、パリからはかなり独立していた。一八世紀には、宮廷も教会も腐敗しており、組織の箍はゆるんでいた。政治感覚は麻痺し、フランスや自分たちに危機が迫っていても何も感じなかった。ただ、互いにけだるそうにもたれあっているだけであった。彼らは、共通の目的をもち、協定によって協力しあう盟友というようなものではなかった。ただ、何の野心ももたず、ただ生き延びることだけを考えている、相互の助け合いがなければ立つこともできないほど弱まってしまったと感じている古くからの仲間でしかなかったのである。

革命は、こうした古い教会に新しい力を与えた。すなわち、革命は、上位と下位の僧の両方を虐待したり、また、上位の僧の世俗の特権を廃止したりすることによって、両者を和解させたのである。最初の共和国は、教会に戦いをいどんだ。その結果、国家の支配権は宗教の敵（共和派）の手に移った。かって、ローマ法王からの要求を行き過ぎだと感じた時それに反対し、国家に援助を求めたフランス教会は、「ローマ教会から独立するということは、それだけ世俗の権力に大きく依存することになり、危険を払うことになる」との認識をもつようになった。教会は、一八世紀には、時の必要性に応じて、地上での自分の使命にいつも尽してくれる自分の味方を選ぶ、行動的で知的な政治勢力であることをすでにやめてしまっていたが、革命によって、教会のそうした性格は更に強くなった。ここでいう、教会の使命とは、宗教を維持することであり、それゆえに、宗教を保護し、もし可能ならば、教育に対して教会がもっている統制権をすべて強化することであった。一九世紀には、フランス教会は決して自ら進んで政治権力を求めるこ

とはしなかった。すなわち、公然とであろうと秘密裡にであろうと、国家を支配しようとする野心などは懐かなかったのである。しかし、教会は、宗教の敵が国家を支配しようとすることには反対し、それを阻止するために戦った。その結果教会は、宗教の、いなとくにカトリック教会の敵が、政治権力を追求するようになると、自らもまた政治的に行動的になっていったのである。敵とは、いうまでもなく、共和派のことである。

### (3)　共和派の人々

当時、共和派の人々とは、どのような人たちだったのであろうか。広くいえば、それは国民公会の、またコミューンの継承者であった。ここでいうコミューンとは、一七九二年から九五年までの、ジャコバン独裁の実現に寄与することになった最初のコミューンのことであり、それは、ジャコバンの助力をえて、フランスの旧王政を実際に打倒した革命的市議会のことである。国民公会やコミューンにはあらゆる種類の人々がおり、なかには臆病だが身分の高い人も含まれていた。共和派の人々は、意見が一致するというよりは、お互いに争うことの方が多かった。しかし、一七九二年には、彼らは協力した。すなわち、王政に反対し、教会と対峙したのである。そして彼らは、反動派を阻止するためには、民衆を扇動し、王座とそれを支持している人々と対決させる以外にないと信じた。

一七八九年当時、政治に意見をもつ人々は、ほとんどが大きな変革を欲していた。一七九二年になると、政治に積極的な関心をもつフランス人の少数派は、二派の集団に分れた。そのうちのひとつは、他よりも大きかった。大きい集団の方は、革命が暴走を始めたことを心配した。無秩序と戦争を恐れたのである。その結果、彼らは王政こそがその両方から自分たちを守ってくれるのではないかと考えた。小さい方の集団、すなわち、ジャコバン派とその同盟者たちは、反動を畏怖し、国王を信用しなかった。反動を抑えるために、彼らは、パリや大きないくつかの都市の暴徒を利用しようと画策した。暴徒といっても、正確な数はわからず、ほんの一握りのフランス人でしかなかった。しか

し、自分たちの味方をさがしていた人々、暴徒を利用することを恐れなかった人々は、それゆえに、自らを民主主義者と呼んではばからなかった。フランス共和派の真の先祖である一七九二年のジャコバン派は、教権反対者であり、民主主義者であった。彼らの多くは、とりわけジロンド派は、のちになって、その年の自分たちの行動を後悔した。彼らもまた、今度は自分たちが、反革命分子、共和国の敵と非難されるはめになったのである。しかし、一七九二年には、彼らは革命家であり共和派であった。

### (4) 共和派とフランス社会主義

さて、一七九二年のジャコバン派と、パリや他のいくつかの大きな都市にいる彼らの味方とは（といってもわずか少数のフランス人であるが）、ひとたび王政が倒されるや、決して友人としていっしょに行動することはしなくなった。一七九二年八月一〇日からテルミドール九日（一七九四年七月二七日）のクーデターまでの革命の歴史は、共和派どうしの死闘の歴史であった。また、その死闘によって、革命の敵である王党派に好機を与えた歴史でもあった。もしわれわれが、一九世紀に華々しい活動を展開した様々な種類の共和主義派を分類しようとするならば、その相剋の模様をまず理解しなければならない。

共和派は、他派と同じく、一九世紀に、第一共和政の時には全く知られていなかった行動形態や理論を採り入れながら発展した。しかし共和派は、最初の大革命を貴重な模範として回顧し、自分たちの魂として崇拝した。彼らにとって大革命は、自分たちの祖国フランスと同じほど愛着を感じることのできる過去の唯一の出来事であった。それは現代社会の生みの親であり、その新しい政府を統治することが自分たちの夢であった。フランス社会は、大革命からだけではなく、それ以前の古い昔から連綿と続いているわけだが、共和派は、古いフランス社会のことについてはよく知らなかった。彼らにとっては、一七八九年以前のフランスの出来事は、有史以前のことでしかなく、殆んどその目

に映らなかったのである。

共和派たちは、きわめて特殊な意味で、大革命の、とくに革命の最後の段階の落し子であった。一九世紀フランスの、政治の舞台に上った主な役者は、共和派以外にはボナパルト派、オルレアン派、そして（政治的行動者としての）教会であったが、彼らもまた、革命の産物であるといってよかろう。もし革命がなかったならば、ボナパルト派やオルレアン派は誕生しなかったであろうし、教会の政治行動も全く違うものになっていたかもしれない。しかし、そうした政治集団は、革命のおかげで自分たちが生まれたとはいえ、共和派のようには革命を擁護しなかったのである。

彼らは、革命が頂点に達した時、フランスを統治しなかった。彼らは、国民公会、ジャコバン・クラブ、コミューンの友ではなく、その犠牲者であり、敵でありもしくは継承者であった。これこそが、もし革命の最後の二年間、すなわち、フランスが国民公会、ジャコバン・クラブ、そしてパリ・コミューンによって統治された二三ヵ月間に、フランスで起こったことを知らなければ、フランスの共和主義を理解することができないということの理由なのである。もちろんフランス社会主義のことも理解できないであろう。というのは、フランス社会主義は、共和派のなかから、同派がもっとも頼りとする貧しい人々の福祉についての考え方から生じてきた自然の産物であったからである。フランス人の社会主義者のすべてが共和派であったわけではない。たとえば、サン・シモンやフーリエのような、何人かの社会主義哲学者たちは、あらゆる政治運動を軽蔑し、冷淡に無視した。しかし、私は、ここでは、社会主義の理論について論じているのではなく、フランスの社会主義を、ひとつの政治的社会的勢力とみているのである。その点からいうと、フランス社会主義は、政治的に急進的な、また、革命へ大きく傾斜した共和派の運動の不可欠の部分をなしているといえる。それゆえフランス社会主義は、共和主義運動の他の勢力に負けないほどの、国民公会やジャコバン・クラブ、そしてコミューンの継承者となったのである。

### (5) 政治理論とその現実適応力

一七九二年八月から一七九四年七月にかけてフランスで起こったことについての短いが削除できない説明をする前に、一点触れておかなくてはならない問題がある。この点を明確にしておけば、私の本書での全般的な意図ももっとはっきりするだろう。すなわちそれは、これから述べることは、政治理論の発展についてではなく、政治運動の行動についてであるということである。もちろん、文学や哲学が最高の評価をえているような古い複雑な社会においては、重要な政治運動には必ずそれに付随する政治理論があった。だが、政治行動に対する政治理論の影響力は、重要であり否定はできないのだが、それはつねに間接的で、どの程度のものかははっきりしない。理論が行動を喚起するには、それがスローガン程度に凝縮されなければならない。だがそうなると、理論のほんのわずかな部分しか生かされず、理論とはいえなくなるかもしれないのである。

この場合、政治理論は自ら最小の断片へと凝縮されなくてはならないだけではなく、もしそれが実践において有効性を発揮するためには、内容を変えたり、他の理論体系から引き出された断片的なものと合併されたりしなくてはならないであろう。こうしたことがあるので、私は、社会主義理論についての長い記述を、理念の歴史ではなく、政治運動の歴史として意図されているものに応用することは、誤りを犯してしまうことになると思う。

## 第二節　最初の革命の遺産

### (1) 革命直後の状況

大革命の永久に残る業績の多くは、じつは王党派の人々が手がけた仕事なのである。彼らが破壊した諸制度は、決して再建されることはなかった。封建制度の最後の残滓にとどめを刺し、フランスの旧来の地方制度を県にかえ、は

じめて特権階級に課税をし、売官や私的目的のために公金を横用することに終止符をうったのは、まさに彼らであった。王党派はまた、教会財産を没収したが、それは宗教に対する敵意からではなく、フランスが破産の脅威にさらされていたからである。教会領からの収入を奪われることになった僧侶に対し、定期的な収入を保障するために、彼らはやむなく、教会のための法令を制定した。それが有名な「聖職者市民法」（一七九〇年に制定され、フランス聖職者を教皇庁から独立させた）である。この法律は、全体的にはフランスの聖職者たちから歓迎された。司教たちは、法王がそれを裁可してくれるように望んだ。司教らは、失ったものは二度と取り戻せないのではないかと危惧しており、そのために今や、できるだけ国家とうまく妥協していくことの方が得策であった。

下位の僧たちは、もれなく自分たちのわずかな俸給を約二倍にしようとする革命と和解した。もしローマ法王が、フランス教会が彼に要望したことを認めてあげていたならば、革命期の最大の不幸のひとつは回避されたかもしれない。しかし法王は、亡命貴族やカトリック勢力に動かされ、フランス教会の要望を拒否した。法王が拒否したということは、多くの司教や下位の僧たちが、国家から要求された宣誓を、良心の問題として拒絶しなければならないと感じたということを意味した。

議会は、教会を怒らせるようなことは何もしなかった。あとを引き継ぐ司祭がみつからない場合は、宣誓拒否の司祭がそのまま任務を続けることを黙認した。しかも、宣誓を拒否した僧がその地位を奪われた時は、彼らに年金が支給されたのである。議会は、革命の第一段階では、旧貴族よりも従順で、合理的な態度を示す教会を敵に回わすようなことは好まなかった。しかも、フランス人は、まだ自分たちの教会に深い愛着をもっていた。哲学者たちは、教養人の狭いサークル以外では影響力をもっていなかった。また、農民や都市の貧困者たちよりも、司祭の方が不信心であるということも事実であった。しかし、革命と教会との間の亀裂は、僧侶も議会もそれを拡げるつもりはなかったが、除去することはできなかった。したがって、もし過激な革命家たちや、盲目の目を不愉快な事実に向けたがらな

い人々が、国家の支配権を握るようなことになれば、争いがさらに激化することは避けられなかったのである。

(2) 憲法制定議会の業績

革命の不滅の業績は、すべて憲法制定議会の仕事であった。その議会は、一八四八年以前のフランスにおいては、選挙で選ばれたすべての議会の中で、最も自由に、かつ最も広くから選出された代議員から構成されていた。憲法制定議会は、つねに王党的であった。このことは、国王のヴァレンヌ逃亡事件に対する議会の態度のなかにはっきりと現われていよう。

国王の意図は、フランスから逃げることであり、義兄弟である皇帝の保護下に入ることであった。彼は王妃といっしょに逮捕された。しかし、王位をおわれたわけではなく、王権を停止させられたわけでもなかった。議会は、あたかも何事もなかったかのように、国王が革命に対してなんの敵意を示さなかったかのように、振舞うことに決定した。議会と政府は、国王は誘拐されたのだと偽った。かりに彼らが国王を廃位にしたとしても、後継者をどこからつれてくるか、全くあてはなかった。国王の兄弟たちは亡命していたし、彼らはフランスの新しい敵であると公言されていた。彼のいとこのオルレアン公は、じつに過激であり、自分の友人や仲間うち以外では全く人気がなかった。共和国を宣言することは、おそらく失敗に終わるであろうと代議員たちは予想した。また、今そうすることは、ある扇動的な政治家や野心的な将軍（おそらくラファイエット）に、独裁者になる機会を与えるようなものであった。もっとも安全な体制、すなわち、それゆえに最善の体制は、保守的な議会王政と分権化された政府であった。これこそが、憲法制定議会が樹立しようとした体制であったのである。

この議会は、圧倒的多数の成人フランス人男子から構成されていた。しかし、この議会は、次の議会の議員は、ごく少数の有権者によってのみ選出されるべきであると画策した。憲法制定議会が制定した最初のフランス憲法は、二

千六百万の人口中、四百万を少しこえる人々にしか投票権を与えなかった。これは、いいかえるならば、フランスの七百万世帯のうち、三百万世帯の貧しい人々は、有権者から排除されたということを意味する。

### (3)　共和派の躍進

立法議会が憲法制定議会のあとをついだ一七九一年の秋までには、多くのフランス人は、革命はすでに目標を達成したのではないかと考えるようになった。そのために、ある人は革命に無関心になったり、ある人はそれに敵意を懐いたりした。では、少数派でしかなかった共和派は、それから一〇ヵ月もたたないうちに、どのようにしてフランスの主人になることができたのであろうか。答えは簡単である。陰謀、インフレーション、パリ、そして戦争である。

#### ①　陰　謀

保守派―私がいう保守派の意味は、政治に無関心ではないフランスのすべての人々、大多数のことである。彼らは、革命と王政を受け入れたが、しかし今や、革命は終らせ、王政は制限したいと望むようになった――は分裂し、優柔不断になり、かつ、強制力のある有効な手段をもっていなかった。保守派は、パリの暴徒の応援がなくては、宮廷に対する初期の頃の勝利をえることができなくなっていた。一七八九年七月、バスチーユを襲撃し、同年一〇月、ヴェルサイユへ行進し、そして、宮廷と議会をパリへ強引に移動させたのは暴徒であった。そうしたことが、あまりにも簡単に勝利のうちになされたので、革命が可能になったのである。ではなぜ勝利できたかといえば、それは、国王が軍隊を頼みにできなかったし、あるいは少なくてもそれをあてにしなかったからである。

しかし、保守派は、暴徒をそそのかすつもりはなかったし、それまでにもそのようなことをしたことはなかった。また保守派は、国民兵も信頼しなかった。それは、中産階級が暴徒から自分たち自身と自分たちの財産を守るために

創設したものだからである。だから、国民兵はブルジョア階級のものであり、それは、憲法制定議会や立法議会の機関ではなかった。パリでは、その司令官にラファイエットがいた。彼はつねに、多くの保守派から独裁制をめざしているのではないかと疑われていたのである。

また、憲法制定議会も立法議会も、整備された機関ではなかった。閣僚たちは国王に責任を負っていた。また、政府はなかったし、どちらの議会にも、代議員に主導権を与えるための閣僚席はなかった。国王は、彼の閣僚たちに対して陰謀をはかったり、あるいは、彼らを通して両議会に陰謀をめぐらしたりした。議会は国王を信用しなかった。だがそれでも、フランスは君主国でなければ存続できないと信じていた。「聖職者市民法」を承認することによって、自らの良心をふみにじった国王は、革命勢力がいかに保守的で自分に好意的であろうとも、その勢力といつまでも妥協するつもりはなかった。国王は、亡命貴族やウィーン、ベルリンの宮廷と接触を保っていた。いな、パリのクラブとさえもつきあっていた。彼は、パリのクラブの暴力が、議会やラファイエットから自分を守ってくれるであろうと期待していたのである。保守派は間違いなく多数派であった。しかし彼らは、怒りっぽく疑い深い、組織をもたない多数派であった。保守派は王制を救うことを望んでいた。だが、宮廷は彼らを破滅させることに決定したのである。

② インフレ

インフレの影響の方が、保守派の陰謀や混迷状態よりもはるかに悪かった。教会や亡命貴族から没収した土地に対しては、証明書やアッシニア紙幣（保証付紙幣）が発行されていた。それらの土地に対する保障はすばらしいものであった。というのも、その土地の多くはフランスでは最高のものだったからである。しかし、土地の売却には時間がかかるため、アッシニア紙幣は法定貨幣ではなかったが、土地が売られる前にしばしば所有者を変えた。土地の売却にはやっかいな問題が伴うとの噂が最初から広まったため、アッシニア紙幣は額面以下の価値しかもたなかった。そ

のために、それはインフレを引き起こした。というのは、アッシニア紙幣は、それが発行された不動産が売却される以前に、数ヵ月間も、いな数年間も流通してしまう貨幣だったからである。

一七九二年四月末までに、約二五億に相当するアッシニア紙幣が発行された。没収財産は、その数倍の価格で売却されたにもかかわらず、回収されたアッシニア紙幣は、わずか四億以下であった。当然没収された財産は、すべて売却された。そして、ブルジョアであろうと農民であろうと、それを買った人はすべて、革命の、あるいは革命の最初の保守的段階の、熱列たる支持者になった。しかし、没収財産を売却しても、インフレの悪弊を除去することはできなかった。いなそれどころか、売却の結果、過激な共和派が、その悪弊をより一層効果的に活用することを許してしまった。というのも、没収財産を購入した人々や買ったといっている人々は、革命がさらに継続することよりも、反動のほうをはるかに恐れるようになっていたからである。じつに、この事実こそが、他のなににもまして、すべての後のフランスの革命と、最初の革命とを峻別している分岐点である。すなわち、最初の革命は、中産階級と農民が、急進主義よりもはるかに反動のほうを恐れた唯一の革命だったのである。一方、インフレは、貧しい人々、とくに都市の貧民を苦しめたのである。

### ③　パ　リ

つぎにパリに移ろう。保守派はパリでは弱体だった。パリは大都会であり、他のどの地よりもインフレの影響を強く受けた。パリで強力なのは、クラブと市当局であった。クラブの中で最も重要なもの、すなわち、もともとヴェルサイユでブルトンの代議員によって組織されたひとつのクラブが、一七八九年一〇月、国王と議会とともにパリへ移ってきた。それは、サン・トノレ通りのジャコバン修道院の図書室で会合を開いた。一七九〇年の末までに、それは会員数千を擁するまでになり、地方の大きな町にある同系列のクラブと連繋をとるようになった。

このジャコバン・クラブには、最初のうちは保守派が沢山いた。しかし、一七九一年末までに、保守派はクラブの雰囲気にだんだんとなじめなくなり、やめていった。ジャコバン・クラブは、パリ以外の地方都市にも支部をもっていたが、それは決して政党ではなかった。会員から正式に選出された指導者というのはなく、時に応じて色々な人が指導した。そこにはまた、確定した原理や綱領などもなかった。しかし、その活動は活発で、市当局や、地方の少数派ではあるが急進派と密接な関係をもっていた。ジャコバン・クラブは、フランスにおける最も体系化され、中央集権化された政治組織であるといってもよかった。一七九一年以降、それは極めて共和的になっていった。その他、いくつかのクラブがあり、なかにはジャコバン・クラブよりもはるかに過激なものもあったが、しかし、ジャコバン・クラブと同等の力をもつクラブはなかった。

保守的で王党的な憲法制定議会によって作られた最初のフランス憲法は、フランス全土に強力な地方自治体を生み出した。パリは、一七九〇年六月以降、強力な市議会と四八の区議会（首都が各区に分割され、各区にひとつの議会がおかれた）をもつことになった。それらの議会、とくに各区の議会は、発足以来、急進的なクラブと密接な関係をもつようになった。革命的なコミューンが生まれたのは、一七九二年八月九日から一〇日の夜にかけてであった。だがすでに、王制を打倒することになる暴動が起こる二年前から、パリはインフレの直撃を受け、確実に急進化していったのである。

### ④　戦　争

私は、陰謀、インフレ、そしてパリの特殊な状況が、どのようにして共和派を強化していったのかを示そうとしてきた。共和派に最初のチャンスを与えたのは、一七九二年四月に、フランスがオーストリア皇帝に対して布告した戦争であった。わずかな善意さえあれば、戦争は簡単に回避できたであろう。というのも、ヨーロッパの君主たちは、

フランスの国王を救済するために、金や人を浪費しようなどとは端から思っていなかったからである。戦争をしかけたのはフランス人であった。それも征服のためではなく（なぜならば、征服欲は最初の勝利がそれを刺激するまではおよびもつかなかったからである）、さまざまな政治集団が、フランスの支配者になるために、戦争を利用しようと企んだからである。

宮廷は、今や殆んど無秩序状態に陥ったといってよいフランスが簡単に敗ければ、王権が復活するであろうと考えた。ラファイエットは、凱旋将軍として議会をもっとたやすく操縦し、クラブを威嚇できればと望んでいた。一方、共和派の大多数は、開戦を希望していた。というのは、そうすれば、フランスのエネルギーを浪費している混乱とインフレの原因は、亡命貴族と列強諸国の陰謀にあるとすることができるからである。このようにフランスは、一八七〇年と同様に、一七九二年の時も、まったく準備していなかった戦争に無謀にも突入していったのである。そして、両方の場合とも、最終的には共和政の成立になったわけだが、共和政に忠誠を示していたのは、パリだけであった。

### (4)　八月一〇日の革命

戦争中の国家において、いくつかの強力な集団が敵国に対する勝利よりも、国内の競争相手を打ち敗かすことに腐心している時、必ず生じるのが裏切りである。しかも、裏切りが生まれると、今度はそれ以上に激しいその裏切りに対する告発が起こるものである。

宮廷は、最初から敵と通じていた。また、数ヵ月後にラファイエットは、志気の落ちた軍隊でもって勝利することを断念し、王室の例にならった。ラファイエットもまたパリへ行進し、クラブを弾圧することに決めたのである。一七九二年八月八日、立法議会がラファイエットに対してなされた告発を赦免した時、クラブとパリの民衆は決起することを決定した。八月九日から一〇日の夜にかけて、パリの各区は委員を選出し、その委員は市庁舎で、革命的コミュー

ン、または市議会を結成したのである。王制に終止符を打った八月一〇日の暴動に火をつけたのは、このコミューンとジャコバン・クラブであった。

一七九二年八月一〇日は、革命の最初の、保守的な段階と、第二番目の、共和的な段階とを分ける分岐点となっている。それはまた、立法議会に対してコミューンとクラブが勝利したことを刻印する日でもある。八月一〇日以前にも暴動はあった。しかしそれは、王権に対するものであった。王権を制限することは、革命勢力の当初からの主要目標と考えられていた。しかし今や、パリは、最初の革命憲法によってつくられた立法議会そのものに対して挑戦し、服従を迫ったのである。クラブとコミューンの圧迫を受けた立法議会は、コミューンを承認したが、その権威は不当に侵害されたも同然であった。議会はまた、国王の権利を停止し、フランスのために別の憲法を準備すべく、新しい立法府の直接選挙を命じることに同意した。

共和派は、革命をその敵から救ったのは自分たちであると主張することにより、自らの行動を正当化した。彼らは、人民の名において暴動を起こした。しかし、彼らが何をいおうと、人民の代表になるように要求したフランスの唯一の機関に対して、暴力を行使したという事実は消滅することはない。かくして、ヨーロッパの革命的伝統の最も古いもののうちのひとつが樹立されたのである。すなわち、自分たちの選挙された代表に対して、「人民の意志」を押しつける組織化された少数派の行動という伝統である。

### (5) 共和派の分裂――穏健派と急進派

共和派はすべて、八月一〇日の暴動をやむをえないものとして承認した。だが、その準備段階においては、共和派は全体として、同じ方法をとっていたわけではなかった。八月一〇日以前から、共和派は、より穏健なグループと、より過激なグループとに分裂しつつあったのである。

穏健派は戦争に賛成であったが、ロベスピエールやマラーを領袖とする過激派はそれに反対であった。穏健派が穏健であった理由は、彼らがパリでは急進派よりも弱く、地方において経済的に豊かで強かったという事実にある。しかし、彼らはロベスピエールやマラーの信奉者たちと同様に、王制には反対し、また軍事的独裁を恐れていた。穏健派はまた、少なくとも八月一〇日以前では、武力の行使が効果的な場合は、それに訴えることも辞さなかった。事実、彼らは六月二〇日には暴動を起こした。しかし、それは失敗した。穏健派は、宮廷やラファイエットを恐れ、反動の危機が及ばないことがわかるまでは、すなわち、八月一〇日の暴動が成功するまでは、急進派に接近せざるをえなかった。しかし、ひとたび八月一〇日の暴動が成功するや、穏健派はすぐに、急進派の方が自分たちよりもその暴動からはるかに多くの利益をえているのではないかということに気がついた。穏健派は議会では、急進派よりも優勢であったが、コミューンや各区に対する影響力では弱かったので、パリの民衆から議会を守るは、自分たちであると決意したのである。

これが共和派の間に亀裂が入った最初の原因である。共和派は当初、政策について争うことはなかったし、また、自分たちは同じ階級や同じ利益を代表しているものであると思っていた。だが、対立が進行するうちに、その性格に微妙な変化が現われた。穏健派は、とくにその力を失いはじめると、ますます穏健になり、それだけ保守派に接近していった。これに対して急進派は、テロに訴えるようになり、また、貧困な人々以外に自分たちの味方はいないと考えるようになった。そして、その性格はますます過激になっていったのである。

こうしたことが、何人かの歴史家が、ジロンド派とモンターニュ派の分裂は権力闘争以外の何ものでもない、と言葉巧みに説明する理由となっている。また一方、同じように何人かの歴史家は、明解に、両派は同一集団内の異なった階級を代表しているのだと主張した。ジロンド派が右傾化し、モンターニュ派が左傾化するに従って、両者の相剋は、やがて所有する者の所有しない者に対する、地方のパリに対する、クラブとコミューンの第三番目の議会である

国民公会に対する、社会戦争の様相を帯びてきたのである。ジロンド派とモンターニュ派は、もともとジャコバン・クラブに属する共和派のメンバーであった。それがやがて、彼らの間に論争が生じ、共和派内の敵対的な集団の対立という形になっていったのである。

私はここでは、両派の相剋をあまり詳細に紹介するつもりはない。ただ必要最小限のことにはふれなければならない。共和派には、これと似たような相剋が、一八四八年と一八七一年の二つのフランスの革命の時にも見られた。最初の革命の特色は、急進派がパリだけではなく、フランス全土の支配者になることができ、それは後にも先にも唯一の機会であったというところにある。フランス史の中で、三回繰り返された共和派の相剋の最初の例こそが、私のテーマにとって、もっとも重要な意味をもつものであるということはいうまでもない。

### (6) 革命の進行

コミューンとパリの各区が支配権を握ることによって起った最初の事件は、九月初旬、首都で発生した政治犯の大虐殺であった。それは、犠牲者の数という点ではパリより少なかったが、地方のいくつかの町でも起こった。コミューンとパリの各区は、パリに侵入しつつあるプロシア軍に対して、全力をあげて抵抗組織をつくった。その際彼らは、もし自分たちが敵と戦うために前進しなければならなくなったとしたら、背後に裏切り者が出ることだけには気をつけなければならないとした。その結果、パリだけで一千百人から一千四百人の人々が処刑されたのである。じつに共和派の最初の行動は、自分たちの敵は容赦なく殺傷するということを誇示することにあった。

同時にまた、彼らは僧に対する攻撃も開始した。それまで革命は、教会に対する扱いは慎重であり、なにかする時には、僧の意見を聞き、その承認をえていた。もし革命が、教会と国家との関係を破綻させたとするならば、それはひとえに、法王の頑な態度に原因がある。僧の大多数が、もともと自分たちが認めたがっていたもの、もしくは、す

くなくとも大めにみたがっていたものを、法王が許さなかったために、やむなく非難せざるをえなくなったのである。しかし今や、共和派はきたるべき国民公会の選挙での僧の影響力を恐れ、僧への攻撃を開始した。八月二六日の布告は、宣誓拒否（フランス語によると従順でない）僧に、一五日以内にフランスを去るように命じた。おそらく二万五千人の僧が、国をあとにしたものと思われる。また数千人以上がどこかに身を隠すことになった。共和派が、「フランスの新しい革命の指導者は、旧来の指導者とは全く違うのだ」ということを証明するのに、それほど時間はかからなかった。長い間フランスでもわからなかったかなりの規模の虐殺が行われ、また、多くのフランス人たちが、自分たちの教会の唯一の代表としていた僧が迫害されるにいたったのである。

### (7)　国民公会とジロンド派

国民公会の選挙では、すべてのフランス人の成人男子に投票権が与えられた。それでも、最初の革命の三回の選挙の中では投票率が最も低かった。投票者は、一七八九年や一七九一年の時よりも少なかった。パリやいくつかの都市を除いては、資産家が思い通りの成果をえた。フランスの歴史家の間では、国民公会の代議員には、不屈の意志をもった少数の人々が選出されたという説が定着している。そして、フランス人の少数派から選ばれた、それら代議員の中のごく少数派が、ロベスピエールと八月一〇日の人々を支持したのである。

一七九二年九月二一日に召集された国民公会は、最初の八ヵ月間、八月一〇日の暴動を行った共和派と、その結果をやむなくうけ入れた共和派との間の、激しい権力闘争に終始した。歴史上山獄派として知られている前者は、ロベスピエールとマラーにひきいられていた。後者はジロンド派であり、パリや、多くは南部、とくにジロンド渓谷の方からきた代議員の一団によって指導されていた。選挙を行うように主張していたのはロベスピエールやコミューンであったが、これまで勝利をおさめてきたのは、山獄派ではなくジロンド派の方であった。最初に提案したのは山獄派

だから、彼らとしても人民の審判を拒否するわけにはいかなかった。八月一〇日の前夜結成された、暴動好きのコミューンは、選挙が行われ、国民公会が召集される前に、自ら解散を宣言した。その直後、ヴァルミーでの戦いとその勝利のニュースが飛び込んできたのである。

八月一〇日の暴動と九月の大虐殺を引き起こした激しい恐怖と疑惑は、戦勝の知らせで静まった。その結果、ジロンド派にとっては、自分の敵たちが起こした暴動によって、自分だけが利益をえたかのようであった。ジロンド派は、パリ市民がそのつけあがった暴力性のゆえに一般的に懐かれている憤慨と、九月の大虐殺によって引き起こされた恥辱とをうまく利用することができたのである。ジロンド派は急速に、穏健共和派が後のすべてのフランスの革命の中で示すようになった性格を帯びつつあった。すなわち、パリは厚かましく残酷なため、フランスの地方の方が優れていると主張し、法を暴力から守ると宣言し、扇動政治家から財産を擁護すると明言したのである。

ジロンド派は、自分たちの態度と山獄派のそれとの間に一線を画すため、一七九二年一〇月、ジャコバン・クラブを去った。ジロンド派は、ジャコバン・クラブの支配権を、山獄派と争えたかもしれなかったが、むしろそれを放棄する道を選んだ。彼らは、地方のクラブにジャコバン・クラブとの接触を断つように要求した。しかし、それに応じたのは、マルセイユやリヨンのクラブなど、わずかでしかなかった。ジロンド派は、自分たちのクラブや、ないしはそれに準ずるような組織は決してつくらなかった。彼らは、上品な運営手段を好んだのである。それは、サロンに集まり、そこで政策を決めるという形であった。だがその結果、彼らがパリでもっていた勢力は激減し、しかもフランスの他の地域でも支持者の組織化を進めることはできなくなったのである。

### (8) 急進派の台頭

フランスが勝利を収めている間は、ジロンド派も強かった。だが、一七九三年の春、フランスの戦況は傾いた。数

週間のうちに、前年の秋と冬に征服した戦果は、すべて失うはめになった。結局、フランス軍が数の上で優位を誇っていたからに他ならなかった。戦争は、軍の苦労にもかかわらず、戦時体制としては全く不備であった。兵士はしばしば脱走し、軍への供給物資は少なく、将校たちのなかにも、足手まといになったり、命令に服さない者が出たりした。しかも、既設の常備軍と、新顔の志願兵の部隊との仲は、しっくりいっていなかった。共和国は敗北と侵略に直面し、新たな軍隊の召集に迫られた。その際、地方で新兵を募ろうとしたが、共和国は地方では人気がなく、かえって反発を招いてしまった。すべての混乱の頂点が、ジロンド派の人気のあるデュムーリエ将軍が、国家に対して行った背信行為であった。

敗戦、経済恐慌、背信行為、そして内乱など、これらの事態は再び急進派に台頭の好機を与えた。パリの各区とジャコバン・クラブは、一七九三年五月三一日、暴動を起こしたが、その中心人物はまたもロベスピエールとマラーであった。フランスの国民議会は、再び群集の乱入を受けた。そして今回は、代議士たちはジロンド派の指導的な議員二九名の逮捕を容認せざるをえなかった。地方では、ジロンド派が、パリとフランスの新しい支配者に対して抵抗した。しかし彼らは、組織化されておらず、敵を権力から追い落すことはできなかった。ジロンド派は、しばらくの間は、ボルドー、リヨン、そして他のいくつかの都市を占拠し、イギリス人をツーロンに押しこめたりした。彼らは権力を求めるだけではなく、生き延びるために戦っていたので、必死であった。ジロンド派は、もし有利になるならば、たとえ王党派や頑な僧たちであろうと、すなわち、数ヵ月前までは、〝反動分子〟と自分たちが非難していた人々であろうと、共同戦線を張ることを辞さなかったのである。

急進派は、一七九三年六月の初頭から、恐怖政治とロベスピエールに終止符を打ったテルミドール九日（一七九四年七月二七日）の反動まで、約一四ヵ月間、フランスを支配した。その間、彼らはフランスの支配者になったのである。しかし、人気はなく、無慈悲で傲慢に振舞った。彼らが権力を握って二週間後、フランスの八三県中約六〇県が、

多かれ少なかれ彼らに反対し、抵抗するようになった。しかも、フランスは再び侵略され、かつフランスには、侵略者に対して立ち向かえるような軍隊はないようにみえたのである。

しかし、一年もたたないうちに共和国は国内外の敵を打ち破り、それまで以上に大規模な装備をした軍隊と、また決して祖国を裏切ることがないと信頼されている将軍とを手にすることができた。もし効率的という言葉が、調和のとれた協力とか、効果的に利用されているエネルギーとかを意味する言葉だとしたら、最初の共和国は決して効率的とはいえなかったということは明白である。唖み合っている集団は、それまで以上に激しくコミューンや区、そしてクラブの支配権をめぐって争いを展開した。たとえ国民公会はそれほど過激ではなかったにしても、山獄派が国民公会を牛耳る手段として使っていた委員会は、その内部で分裂しており、一部は過激化していたのである。また、もし公安委員会の何人かが、その委員会の最強スタッフであるロベスピエールに対する陰謀に加わらなかったならば、テルミドールの反動は不可能であったに違いない。

ロベスピエール自身は、決して独裁者ではなかった。実際、フランスはまだ、純粋な理論になすがままに身を任せるという状態ではなかった。公安委員会のメンバーは、熱列たる愛国主義者であり、本当の共和派であり、金持ちと僧侶の敵であった。彼らは、金持ちや僧侶は共和国を裏切るのではないかと疑っていたのである。しかし、彼らはもう一面では、ナポレオンと同じ位、臨機応変に行動するタイプであった。気質とか共感とかという点では、彼らはナポレオンとはかなり違っていたが、実践面では、人間社会や政治についての全般的な理論にもとづいて行動するわけではないという点で類似していた。そして、この気質とか、かれらの共感こそが、一九世紀フランスの急進的な共和派の伝統を形成していったのである。

### (9)　山獄派の措置

山獄派は、「地方は自分たちに好意的ではない」ということを感じていたので、自分たちの信条をパリで実行することにした。また彼らは、民衆をあまり信用できず、しかも、「自分たちは目に見えない敵や裏切り者によって狙われている」との意識が強かったので、テロに頼った。金持ちと農民は、インフレによって利益をあげ、また、わずかばかりの商品を買い占めたりしていた。そのため、彼らは、戦争の結果やむなしとされた価格と分配の統制には激しい憤りを示した。山獄派は、このような金持ちや農民は、自分たちのほんとうの友ではなく、真の友人とは貧しい人であり、また、もし価格が不安定になったり、生活必需品が保証されなかったりしたならば、飢えてしまうであろう財産のない人々であると感じていた。山獄派は、最後は、自分たちが孤立していることを自覚し、勝利することこそが恐怖政治を弁解の余地のないものにすることであると決意し、所有権を自分の友人の利益になる方向に思い切って移行することにしたのである。

一七九四年二月末に発令された布告は、共和国のすべての敵、すなわち、フランスに拘留されているすべての政治犯の財産を没収すると命令した。もうひとつの布告には、国中のコミューン当局は、貧しい人々のリストを作成するように命じられていた。当時フランスには、三〇万の政治犯がおり、その大部分は金持ちであった。そのため没収された財産は膨大なものとなった。もちろん革命の最初の、保守的な段階においても、大規模な財産の没収はあった。しかし、教会や亡命貴族から取り上げたその財産は、競りにかけられ、もっとも高額な入札者に売却された。そのため、その多くは金持ちが買い、かなりの量は農民が手に入れた。すなわち、初期の没収は、財産がある金持ちの手から、他の金持ちの手に移ったにすぎなかったのである。それは、国の負債を完済し、予算の均衡をはかるために最初にとられた、純粋な財政的、政治的措置であったということができよう。

しかし、今回の新たな財産没収措置は、性質を全く異にしていた。それは不平等を是正し、貧乏人がフランスの新

しい支配者に愛着をもつようにさせるための措置であったのである。ただしそれは、社会主義的な措置ではなかった。なぜならば、その動機は、政治的に一時的に切りぬけることができればそれでよい、というものであったからである。しかもその措置は、もし実行されたならば、社会的に多大な影響を与えたであろう。また、仮にそれが実施されなかったとすれば、それは、テルミドール九日の事件がその実施を未然に防ぐべく起こったためである。

### (10) 最初の革命の性格

最初のフランス革命は、その第二段階において、共和的な性格が現われてきたとはいえ、一貫してブルジョア革命であった。一七八九年から一七九四年にかけて、フランスで権力や影響力をえた人々の中で、社会主義ないしは共産主義と称せられる人は一人としていなかった。最初の革命期を通して、フランスで共産主義を説く人たちはいた。その数は、一七八九年以前より多かったし、彼らの話に耳を傾ける人もいた。しかし、彼らは決して恐ろしい存在ではなかった。一七九六年の有名な共産主義者の陰謀、バブーフの〝平等者の陰謀〟でさえも、何人かの歴史家は、その重要性を力説するが、じつは、その事件は、それほどの重要性をもつものではなかった。要するにその事件は、腐敗、奢侈、そしてテルミドール以来、フランスに蔓延している貧乏人に対する冷淡さへの抗議だったのである。陰謀に加わった人の数は少なく、しかもその人々も多くは、自分たちの指導者が何をやろうとしているのか知らなかったといってよい。バブーフの陰謀は、仰々しい伝説を生んだが、その事件自体は、決して重きなすものではなかったのである。

最初のフランス革命は、社会主義的なものではなかった。それは、その展開過程のいかなる段階においても、プロレタリアート的なものではなかった。パリの群衆は、たしかに重要な役割を果たした。しかし、群衆をあやつり扇動したのはすべてブルジョアジーであった。労働者たちは、中産階級で、かつ急進派の人々の道具でしかなかった。その急進派の人々のもともとの目的は、労働者に選挙権を与えることでも、彼らを豊かにすることでもなかったのであ

る。

しかし、労働者たちは道具であったとはいえ、明確な意志をもつ、熱意ある道具であった。急進共和派のマラーやロベスピエールを信奉する人たちは、労働者、とくにパリの労働者と同盟を結んでいた。そして、この同盟こそが、彼らが勝利するうえで不可欠なものであったのである。なお、この同盟が功を奏したのは、ジャコバン・クラブ、コミューン、各区、すなわち、労働者によって選出された市当局との密接な協力があったからである。この同盟があったからこそ、八月一〇日と五月三一日の暴動は成功し、また、パリに権力を集中させていた少数派が、フランス全土を支配し、国の内外のあらゆる敵を破ることができたのである。

私は、最初の革命が社会主義的でもなければ、プロレタリア的でもなかった、と述べてきた。それは事実その通りである。しかし、そこには見落すことができない、もうひとつの重要な真理がある。その点については、リヒテンベルガー Lichtenberger が、自著『社会主義とフランス革命』*Socialism and the French Revolution* の中で見事に指摘している。彼がいうには、一七九三年には、富者と貧者との間に新しい対立が生じ、その対立は、それまでの特権階級と非特権階級との間の対立にとってかわった。この変化を引き起こす活動を行った急進共和派や山獄派は、決して自分たちは有産階級の敵であるとは思っていなかった。しかし、山獄派の犠牲になった人々の目には、山獄派こそ有産階級の敵であると映ったのである。

※本稿は、*JOHN PLAMENATZ, The Revolutionary Movement in France 1815-71* (LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952) の翻訳である。章・節以外の小見出しは訳者がつけた。
次回は、「第二章　復古王政」である。